

令和元年6月17日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02697

研究課題名(和文) 日本の中学生の英語による読解の躓きを分析し読解力を回復させる指導方法の開発研究

研究課題名(英文) Exploring teaching methods to help junior high school students develop their reading comprehension ability based on an analysis of the difficulties they have reading in English

研究代表者

小野 尚美 (ONO, NAOMI)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：10259111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間の前半2年間で、Reading Recovery Program(以下、RRと略す)の日本の英語学習者への応用方法を書籍2冊にまとめた。後半2年間では、公立中学校で英語を学ぶ生徒にRRの指導方針を踏まえた教え方で英語を教え、英語指導方法の研究を行った。学習者は、英語の聞き話す能力の習得が最も重要であると考えているため、英語の読み書き訓練が軽視されていることが分かった。音声訓練をした後必ず読み書き活動をして英語の知識を確認し、真の英語のコミュニケーション能力を高めるためには、単語の意味、音、綴りの理解を徹底し、学習者の既存の知識に注目したリテラシー教育の視点が必要であることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、学習者の躓きに注目することにより英語指導方法を考案する点、学術的及び社会的意義があるといえる。日本の英語学習者の躓きの原因を探り、改善することで英語が苦手な学習者の英語能力を改善する方法の糸口を見つけるといふ発想は重要である。また英語圏で学習者の躓きを取り除くことに効果を発揮しているRRを研究のモデルとしている点もこれまでにない研究といえるであろう。日本の英語学習者の英語力を伸ばすためには、特に音声言語と書記言語の両方の能力の訓練に効果を発揮する一連の指導手順がある、リテラシー教育の視点に基づくmethodが必要であり、この度の研究はそれを目指したことが有意義であった。

研究成果の概要(英文)： I spent the first two years writing two books on how to apply the tenets and teaching methods of the Reading Recovery Program to the methodology of teaching Japanese students learning English. In 2017 and 2018, two books were published. In the latter two years I taught English to the junior high school students based on the teaching methods used in the Reading Recovery Program.

Analysis of my teaching experience allowed me to realize the following two key things. In the first place, these junior high school students need to thoroughly understand the relationship between sounds, letters and meaning of the words to improve their reading and writing in English. In the second place, they also need to use their background knowledge to assist their English learning, which suggests that English education should be literacy-based. In order to become good communicators in English, learners should be able to function in English within various contexts.

研究分野：英語教育

キーワード：読解の躓き Reading Recovery Program リテラシー教育 Emergent Literacy

## 1. 研究開始当初の背景

現在、日本の中学校での、英語で躓き「英語が苦手」「英語の授業が半分以上わかっていない」と感じている生徒が多いという問題に注目する。英語の苦手意識のある学習者の能力を回復するための指導方法を開発することで、苦手意識のある学習者の数を減らし、自立した英語学習者を育成する必要がある。

日本の中学生の英語苦手意識はどこからくるのか。一つには、小学校で学ぶ英語と中学校で学ぶ英語の違いに気づき、戸惑う傾向にあることがよくいわれている。英語の文字指導（読み書き）を受けてこない児童は、中学での文法規則の学習とともに読む英語の量が多くなり、その後の英語学習に躓いてしまうということである。例えば、平成26年度小学校外国語活動実施状況調査（文部科学省、2014）で、小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったという質問に対し、中学1年生の80.1%が「英単語を読むこと」、83.7%が「英単語を書くこと」、79.8%が「英語の文を読むこと」、80.9%が「英語の文を書くこと」をもっと学習しておきたかったと回答した。また同調査で外国語活動を経験した中学1年生の外国語担当教員は、69.8%が英語の文字や単語、文章を読む力が高まっていない、79.7%が英語の文字や単語、文章を書く力が高まっていないと回答した。さらに中学の授業では音声・文法指導や「聞く」「読む」活動が中心で、「話す」「書く」活動は少ないという課題が明白になった（ベネッセ教育総合研究所、2015a）。一方、小学生5、6年生の「外国語活動」では英語の音声を「聞く」、発音練習や歌を歌う活動が7割以上を占めており、英語の文や文章を読み、英語のことばを書くといった活動は3割から4割程度である中、保護者の6割は「外国語活動」に満足しておらず、児童が英語力の基礎を身に付け、中学校での英語学習が円滑になることを望んでいる（ベネッセ教育総合研究所、2015b）。

上記のような状況を鑑み、日本の英語を学ぶ中学生の英語の躓きを究明し、英語能力を高めることは喫緊の課題であると考えた。

## <引用文献>

ベネッセ 教育総合研究所、中高の英語指導に関する実態調査2015、2015a、Retrieved

Oct. 1, 2018 from [berd.benesse.jp/up\\_images/.../Eigo\\_Shido\\_all.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/.../Eigo_Shido_all.pdf)

ベネッセ 教育総合研究所、小学生の英語学習に関する調査(子ども調査)(保護者調査)、2015b、

Retrieved Oct. 1, 2018 from [berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4760](http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4760)

文部科学省、平成26年度小学校外国語活動実施状況調査の概要、2014。

## 2. 研究の目的

本研究では、日本で英語を勉強している中学生の読みにおける躓きの原因を究明し、その読みの能力を改善する指導方法の開発を目指す。この研究では、特に英語の読みを困難にしている原因を突き止め、本研究者がこれまで研究してきた Reading Recovery Program の指導理念と指導方法を応用し、日本で英語の読みで躓いている中学生のための効果的な指導方法を開発する。

## 3. 研究の方法

本研究は、英語圏で読み書きに躓いている児童の能力を回復させるための介入プログラムである Reading Recovery Program（以下、RR プログラムと略す）の指導理念と指導方針をモデルとしている。この指導方針をいかにして日本で英語を学ぶ学習者の読み書き能力養成のための指導方法として応用するかが最初の2年間の課題となった。

RR プログラムは、学習者を取り巻くコンテキストの中で、英単語の音声（フォニックス訓練を含む音声理解活動）、文字理解（綴りと発音の一致）、意味の相互関係の理解から始まり、文の理解、テキスト全体の理解へと教師とのインタラクションを通して読み書き活動を行いながら、ことばの読み書き能力をつけていく指導方法である（小野、高梨、2014）。毎日 30 分の訓練であるが、音声訓練、インタラクションを通じた読解目的にした読みの活動、key sentence の文構造の理解を確かめる Cut-Up Story 活動、日常生活で起こったことについて英語で書く活動、最後に読み聞かせを含むリーディング活動となっている（小野、高梨、2014）。英語を外国語とする学習者のための言語プログラムに必要な要素がすべて入っている指導方法である。この RR プログラムが小学生のために実施されているものであるため、日本の場合でも最初は小学校 5、6 年生から中学 1、2 年生の英語学習者を対象にどのような指導方法として応用できるか、それまでのオーストラリアやニュージーランドでの研修結果を踏まえて日本の学習者向けの指導方法を考案し、実際に小学 5、6 年生の英語の授業でパイロット研究授業を実施した。その実験結果と開発した指導方法については 2017 年に出版した『小学校英語から中学校英語への架け橋 文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開発研究』にまとめた。

さらに、指導を効果的に行うためには教材の活用方法についても考える必要がある。RR プログラムでも多様な題材を扱った教材が使われている。それらの教材は、児童の日常生活に密着した内容と表現が扱われているため、日常生活に必要なことばのやり取りができる能力という意味における真のコミュニケーション能力養成に役立つ。日本では、投げ込み教材を使うこともあるが、基本的に公立中学校では検定教科書を使うことになっているため、通常使う教科書のテキストをいかに効果的に活用して英語の読み書きを養成するかについての研究を行う必要があった。このような理由から、この指導方法を日本の英語学習者に応用するにあたり、効果的な指導を助ける英語教材の活用方法を考案し、それらについて『英語教材を活かす - 理論から実践へ - 』の中でまとめ、2018 年に出版した。

2017 年と 2018 年には、実際に公立中学校に通う 3 年生を対象に英語の補習コースにて RR プログラムの指導理念を応用した教え方で英語指導を試みた。この補習コースに参加した学習者は英語が幾分苦手意識を持っていた。教える形態はグループ指導であった。当該公立中学校が使っている教科書及び読みトレ（中学生用多読教材）を使って英語の読み書き指導を行った。この指導の内容については、2018 年 1 月 17 日に開催された武蔵野市 外国語活動・英語科部研究部会 外国語・英語科部研究部会にて「Reading Recovery Program の理念と指導法を日本の中学生への英語指導に活かす方法の模索」と題して講演を行った。

#### < 引用文献 >

小野尚美、高梨庸雄、金星堂、『「英語の読み書き」を見直す - Reading Recovery Program 研究から日本の早期英語教育への提言 』、2014、1-179。

小野尚美、高梨庸雄、土屋佳雅里、朝日出版社、『小学校英語から中学校英語への架け橋 文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開発研究』、2017、1 - 244。

小野尚美、高梨庸雄、朝日出版、『英語教材を活かす - 理論から実践へ - 』、2018、1 - 141。

#### 4 . 研究成果

4 年間の研究期間のうち最初の 2 年間で研究した内容については、2017 年及び 2018 年に朝日出版社から出版した著書 2 冊を参照していただきたい。特に 2018 年に出版した『英語教材を活

かす - 理論から実践へ - 』の中に書かれている英語教材の活用法は、中学校だけでなく高等教育における英語指導にも応用できるものである。内容としては、「読むこと」とことばの習得の関係についての説明から始まり、ポートフォリオの活用法、語彙学習の重要性、Storytelling 活動、Active Learning 指導の在り方、文字、音、意味を結びつける活動、Guided Reading と Guided Writing、Retelling と Rewriting 活動、さらに読解活動の評価方法を取り上げている。

後半の2年間で実施した中学生への補習授業を通じた指導では、中学生の英語習得に対する考え方及び学習方法について理解することができた。少人数グループ学習のためこの結果を一般化するには今後さらに研究を続ける必要があるが、学習者にとって英語は音声によるコミュニケーション能力の習得が最終目的であるというような信条を持っているため、英語で書くことには重きを置いていないことがわかった。中学英語教師、小学校英語教師、中学校及び小学校長との懇談でも、実際の授業では書く活動はあまりしていないということだった。音声訓練をした後必ず読み書く活動をして英語の知識を確認する必要がある。また、学習者の既存の知識に注目したりテラシー教育の視点から英語のコミュニケーション能力を高める訓練をすることが重要であることを確認できた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

[学会発表](計 1件)

小野尚美，“Reading Recovery Program の理念と指導法を日本の中学生への英語指導に活かす方法の模索 - 武蔵野市立第二中学校での補習授業での試み.” 武蔵野市 外国語活動・英語科部研究部会 外国語・英語科部研究部会にて講演、2018.

[図書](計 2件)

小野尚美、高梨庸雄、朝日出版、『英語教材を活かす - 理論から実践へ - 』、2018、総頁数 141 頁(共著：担当 pp.1 - 39、pp.87-141)。

小野尚美、高梨庸雄、土屋佳雅里、朝日出版社、『小学校英語から中学校英語への架け橋 文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開発研究』、2017、総頁数 244 頁(共著：担当 pp.3-69、pp.107-118、pp.155-244)

## 6. 研究組織

(1) 研究協力者

研究協力者氏名：高梨庸雄

ローマ字氏名：Takanashi Tsuneo

職名：弘前大学名誉教授

研究協力者氏名：土屋佳雅里

ローマ字氏名：Tsuchiya Kagari

職名：杉並区英語講師

については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。